

REPORT

オンライン活用による アイデアソンは学生の関係人口を創出できるか ～課題解決アイデアソン「ミノワッサン」を例に～

地域づくり研究所ミノワッサン 運営事務局プロシエクトリーダー 田中司
特定非営利活動法人SLC代表 幅野裕敬

1 はじめに

南アルプス、中央アルプスの山々に囲まれる長野県箕輪町は、人口約2万4千人の長野県内でもっとも人口の多い町である。そんな箕輪町も例に洩れず少子高齢化が進み、生産年齢人口までの女性数も減少傾向にある。生産年齢人口までの女性数減少のため、出生数も減少している。一方で、2016年からは転入超過を続けており社会増減は増加傾向にある。このように、全国の多くの地方自治体が抱える課題を箕輪町も抱えており、都市部から移住者を増やすための取り組みを積極的に行っている。

空き家活用や移住者への様々な助成事業など多様な事業を実施するなかで、

地域づくり研究所では、都市部の若者をターゲットにした関係人口創出事業を担っている。

本事業は、若者の「やってみたい」を地域で応援しようをコンセプトに実施されている。若者に地域の担い手になってもらおうといったコンセプトで実施される事業の真逆をいった事業である。若者の「やってみたい」を応援し、地域を使って活発に活動してもらうことで、それが結果的に地域に還元されていくだろうという発想で事業を進めている。

本稿で事例を紹介する箕輪町でのアイデアソンは、ひとりの学生の「箕輪町を舞台に地域アイデアソンをやってみよう」という一言から始まった、ま

さにこのコンセプトを体現した企画である。

次章からは、実際にアイデアソンを運営した学生たちが、どんな活動をして来たか、活動をしていく中でどんな変化があったか、オンラインを活用したアイデアソンでつながりをつくることのできたのか、学生たちの目線でもとめてもらっている。

2 コロナ禍でも地方と都市の関わりを生み出したい

現在の日本では新型コロナウイルスが蔓延していて、都市だけにあらず地方でも猛威を振るっている。その影響もあり地方に入っている調査や実践活動、地方の住民の方との現地での交流など

ができず、コロナ禍以前と同じような活動ができない現状である。筆者が通っていた大正大学地域創生学部でも授業はもちろんのこと、本来は全国各地の実習地に約1ヶ月滞在し、その地の地域資源の価値を理解するカリキュラムである「地域実習」もオンラインでの実施となった。正直なところ、1年次に地域実習に行った際には地域で様々な方々にお世話になったため3年次に成長した姿を見せたいと思っていた。そのため、地域実習に行くことができなかつたのはとても残念であった。また、オンライン実習では、地域とどのようにつながってどのように調査をしていけば良いのか分からないという漠然とした不安があった。

そんな不安を抱いたまま始まった3年次の地域実習だったが、始まってみると意外にも地域に行つての実習もオンラインでの実習もやることは同じであると感じた。実習で学生が地域に入り行うことは、主に先行事例調査・ヒアリング調査・アンケート調査・地域資源の発掘などである。オンラインでの実習は、「地域資源の発掘」などの実際に目で見て触れることで情報が得ら

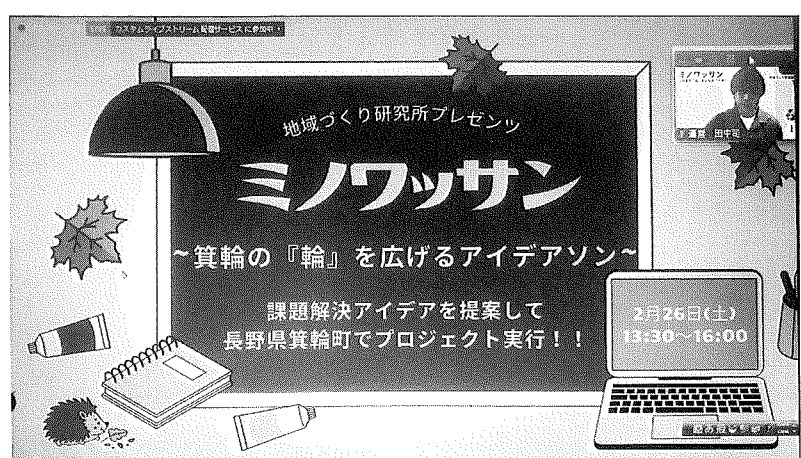
れる活動は制限されていたが、それ以外の活動は特に現地での活動と大きな差はなく進められたのではないかと感じている。中でもヒアリング調査に関しては、物理的な距離がある中でも簡単につながることができ、調査としては対面で行うものと大きな差はないものとなった。さらに、現地でお会いしたことのない方々ともオンラインを通してつながることができ、その後も卒業論文執筆時などにアドバイスをいただくなど、オンラインでのヒアリングをきっかけに継続した関わりをもつことができた。

このように、オンラインでの地域実習を経験し、地域に行つての実習とやることは変わらない、継続的な関わりをもつことができたという経験から、「コロナ禍でもオンラインで地域と都市の関わりを生み出すことができるのではないか」と考えた。こうした考えをもとに、コロナの影響で地域での活動に興味があるが参加できない都市部の学生やコロナ禍でも都市部の若い層や学生との関わりを作り出そうと励んでいる地域とをオンラインでつなぎ、関わりを生み出すことができるイベン

トが何か開催できないかと考えた。次章から、その関わりを生み出すために考えたイベントを紹介していく。

3 課題解決アイデアソン「ミノワッサン」のオンライン開催

前述のとおり、コロナ禍でも地方と都市の関わりを生み出すイベントとし



て、「ミノワッサン」箕輪の「輪」を広げるアイデアソン」というイベントを考案した。このイベントは箕輪町を舞台として2022年2月に、長野県箕輪町と地域づくり研究所（NPO法人S.L.C）が主催しオンラインで開催した。ここからは、箕輪町を舞台として開催することとなった経緯とミノワッサンとはどんなイベントなのかを説明する。

箕輪町を舞台として開催することとなった経緯は、筆者の中に箕輪町で活動をしたという思いや箕輪町に対する愛着があったことである。

筆者は、箕輪町で1年次に約1ヶ月間の実習、2年次の箕輪町の特産品の販売、3年次に約1ヶ月間のオンライン実習を経験した。

1年次には実際に現地に訪れることができたため、多くの住民の方との話をするなどして触れ合い親睦を深めた。

2年次には、個人的に箕輪町に訪れて1年次にお世話になった方と顔を合わせることや東京での特産品の販売のために、箕輪町の生産者の方との新たな関わりを生み出すことができた。

域で実習を経験した学生を巻き込んで、企画・運営を学生主導で行ったオンラインイベントである。

イベント名は、主催でもある長野県「箕輪町」と「アイデアソン」を振り「ミノワッサン」とした。ミノワッサンは、箕輪町が現在抱えている課題に対してチームで解決策を考え、アイデアを発表し、提案されたアイデアの中でも優秀なアイデアに関してはプロジェクト化していくイベントである。

各プロジェクトは、箕輪町と地域づくり研究所の支援を受けて実際に活動をしていく。住んでいる地域と関係なく、箕輪町を活動のフィールドとして継続的に関わり、愛着をもつてくれる若者を増やすことも開催した目的の一つである。

また、ミノワッサンに付随する形で「ミノワッサン準備セミナー」というイベントも開催した。このイベントは、ミノワッサン1日だけでは実現できない継続的な関わりを生み出すことや現地にいくことのできない代わりにオンラインで住民の方と交流し、箕輪町の課題を知ってもらうことを目的に開催したものである。

3年次には、新型コロナウイルス感染拡大により箕輪町に訪れることは叶わなかったが、オンラインで新たな関わりを作り出すなど箕輪町の方々の関わりを絶やすことはなかった。

このような3年間もの継続的な関わりをもち続けてきたこともあり、箕輪町にイチ早くいきたい、箕輪町で活動をしたい、箕輪町と関わり続けたいといったような心の変化があり、筆者の中に箕輪町への愛着が生まれた。

また、筆者は3年次の実習の際に「関係人口」をテーマに個人研究を行った。箕輪町も関係人口の創出を目標とした計画を立てていたため、箕輪町が関係人口の創出を一つの目標として実施しているファンクラブの会員へアンケート調査を行いニーズやターゲットの調査を行った。

4年次の卒業研究では、箕輪町の関係人口におけるターゲットの調査と関係人口を増やすためのイベントを行おうと考え、地域づくり研究所を通して箕輪町にイベントの実施を提案したところ、ご協力いただけることになり、箕輪町を舞台にイベントを開催する運びとなった。

全3回開催し、1回目に箕輪町を知らない状態からまずは箕輪町を知ってもらう、2回目に箕輪町のことを知っている状態から箕輪町の住民の方々と交流して課題を知ってもらう、3回目に課題を知った状態から箕輪町でのアクションプランを考えてもらうといった内容で行った。

次の章から、こうして開催したミノワッサンの結果を、イベント参加者の様子やアンケートの回答などをもとに提示していく。

4 ミノワッサン開催による関係人口創出への効果

今回のアイデアソンでは、出場者として大正大学地域創生学部から4チーム（10名）と他大学の混合チームが1チーム（3名）の計5チーム13名に参加していただいた。

審査員には、まちづくりを目的とした起業や実践活動を数多くされている大正大学地域創生学部金子洋一先生、実際に学生と地域でショップ経営をされ、出店地域などの活性化についての実践と研究をされているマーケティングが専門の大正大学地域創生学部高

関係人口増加につながるイベントを考案している中で、これまでの自分を振り返ってみると、大学4年間箕輪町のもつ課題と自身の興味・関心がリンクし様々な活動を行ってきたことに気が付いた。そこで、学生の「こんな活動がしたい」や地域の「こんな課題・目標がある」を掛け合わせることで、より強固で継続的な活動や関わりが生まれ、愛着へとつながっていくのではないかと仮説を立てた。そのため、継続的に関わる仕組みを構築していけば愛着をもつ人を作り出せるのではと考えた。

また、前述の通り地域に行つての実習もオンラインでの実習もやることは同じであった点から、オンラインでの継続的な関わりでも愛着を生み出すことはできるのではないかと考えた。そこで、学生の地域でこんな活動がしたいという思いと、地域のこんな課題の解決策・目標の達成方法が知りたいという思いをかけ合わせたイベントとして、「ミノワッサン」というアイデアソンを企画した。

ミノワッサンというイベントは、箕輪町に関わっていた筆者がその他の地

柳直弥先生、ミノワッサンの主催でもあるまちづくり系のNPO法人を運営されている幅野裕敬氏、そして箕輪町役場からまちづくりや町の魅力発信を担う企画振興課から毛利岳夫課長の4名に参加いただいた。

審査は、「実現可能性のある提案となっている」や「箕輪町の課題解決策となっている」をはじめとする5つの審



ミノワッサンの様子

査項目と「関係人口の創出につながる・東京と箕輪の人が協働していく運営体制である」という条件をもとに審査をしていただいた。

審査会では、我々運営が用意した箕輪町の方々と交流の機会やアイデア考案のヒントを得られるコンテンツ、ネット上で公開されている箕輪町の情報をもとに、参加学生たちが箕輪町の抱えている「コミュニティ形成」「空き家の利活用」「キャリア教育」「耕作放棄地の活用」「福祉への関心」など様々

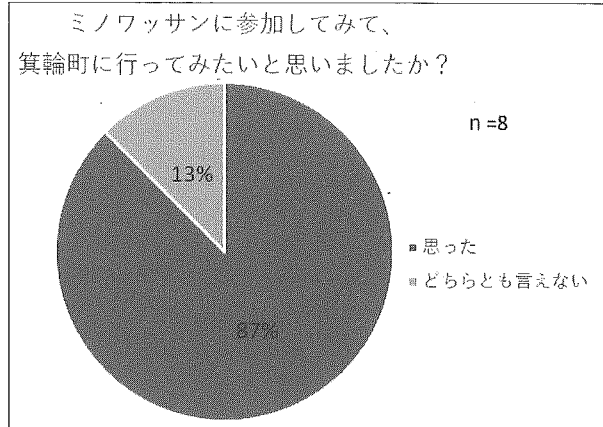


図1：箕輪町に行ってみようと思ったか？

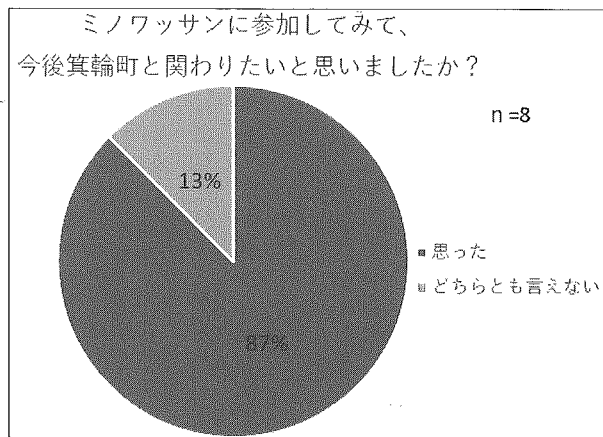


図2：今後も箕輪町に関わりたと思ったか？

な課題に対して学生自身のやりたいこと・興味関心と絡めて解決策のアイデアが発表された。今回のミノワッサンでは、「ハンデを超えた学習活動として空き家を改修して秘密基地を作る」「耕作放棄地を活用したキャリア教育としての農業体験プロジェクト」という2つのアイデアを発表したチームが最優秀賞に選出された。

他にも実現可能性のある優秀なアイデアが発表され、毛利課長からの講評では「いただいた意見などを精査して、

どうすれば実行していけるかを考えていく」と学生の活動を積極的に応援していただける旨のコメントをいただくことができた。

イベント開催後のアンケート調査では、ミノワッサンに参加してみても箕輪町に行きたくなくなったかなどを回答してもらった。ここからは、そのアンケート結果とイベントの目的は達成できたのか考察していく。

アンケート結果としては、箕輪町に行ったことの無い参加者という条件の内「ミノワッサンに参加して、箕輪町に行ってみようと思ったか？」という質問と「今後箕輪町に関わりたと思ったか？」という質問に対して87%が「思った」と回答している。

この結果から、ミノワッサンの参加者の大半が箕輪町のことを「知らない・興味のない」状態から箕輪町に「行ってみたい・今後も関わりたい」という状態になったことがわかる。

加えて、学生の「地域でこんな活動がしたい」という思いと、地域の「こんな課題の解決策・目標の達成方法が知りたい」という思いをかけ合わせた

イベントであったことで、箕輪町で実際に活動するイメージをもちやすかった、箕輪町で活動できるのが楽しमितった活動に積極的なコメントやミノワッサン準備セミナーに参加することによる箕輪町との「継続的な関わり」をもつことができたなどのコメントをいただいた。(図1、2)

つまり、ミノワッサンが関係人口創出のファーストステップを作り出すことができたのではないかと考えられる。ミノワッサンの参加によって、箕輪町への愛着と具体的な活動イメージを参加者の中に育むことができたことで、参加者が箕輪町へ行きたくなくなる・関わりたくなると思ってもらえることができ、関係人口のファーストステップを歩み始めることにつながったのではないだろうか。

ミノワッサン開催の目的を達成できたかという点に関して、

「継続的に関わる若者の創出」といった点では、前述の参加者へのアンケート結果やヒアリングから分かるように、意欲的な参加者が多いことから、今回のイベントでは短期間・少数ではあったが継続的な関わりを生み出すこ

とができた。また、前述の通り箕輪町役場としても提案されたアイデアを実行へ移していく意志が見られることから継続的に関わる若者の支援体制も構築することができたのではないかと考える。

ミノワッサンの開催による変化は、参加学生だけではなく運営側の学生にもあった。今回のミノワッサンは企画運営の大部分を、筆者を含めた大正大学地域創生学部(NPO法人SLC)が手掛ける地域づくり研究所(所属)の学生3人が担っていた。

筆者は箕輪町実習を経験していたが、ほかの2人は全く別の地域での実習を経験しており、箕輪町は名前を知っている程度でイベント開始前は一切関わりがなかった。そのため、ミノワッサン関連イベントやミノワッサンの準備を進めていく中で、箕輪町のことを公式ホームページや振興計画等を参考にして調べ、時にはオンラインで箕輪町の方との交流をしてヒントを得るなど、企画運営者として箕輪町のことを考える活動を行ってきた。

イベント後、運営メンバーの2人からは「箕輪町に行ってみよう」「今後も

関わっていきたい」という声が上がった。これは、ミノワッサン参加者であった変化と同じく、箕輪町のことを「知らない・興味のない」状態から運営に継続的にかかわること、箕輪町に「行ってみたい・今後も関わりたい」という状態に変わり「愛着」をもち始め、関係人口のファーストステップを歩み始めた言えるのではないだろうか。

5 ミノワッサンの振り返りと展望

今回のミノワッサンは、初めての開催としてはとても良い内容の「都市と地方の関わりを生み出すイベント」として幕を閉じることができたのではないかと考えている。

アンケートのミノワッサンに参加した感想の回答では、「自分たちの発表だけでなく、他の先輩方のアイデア、さらには教員や町役場の方の生の声・意見を聞くことができ、自分自身の学びとして得られた」といったような声もあり、都市と地方の関わりをきっかけに加えて、学生の学びの機会も創出することができていたことが分かった。

一方で、今振り返ってみれば「もつとオンラインでもこんなことができた

のではないか」と考えることがある。

参加者からの意見として「オンラインのため仕方のない部分ではあるが、得られた箕輪町の情報が少なかつたと感じた」という声が上がった。

このことに対しては、地域の方に協力を仰ぎ町内のバーチャル視察を行うことやより多様な住民の方々との交流の場を用意するなどすれば、多少は解決できたところなのではないかと考えている。

また、今回のミノワッサンの目的が「継続的に関わる若者の創出」ということもあって、前述の「ミノワッサン準備セミナー」を3回に分けて行ったが、中には全てのセミナーに参加できなかった参加者もいた。そのため、セミナーを3日連続で行う・1日に凝縮するなどコンパクトにして、ミノワッサンまでの間に何回か町の方との交流の機会を設ける、といった開催方法もあつたのではないかと考える。

今後の展望としては、今回のミノワッサンで受賞したチームへの支援をして、箕輪町と継続的にかかわって活動してもらうことも大切となってくる。

今回のミノワッサンで受賞したチームと受賞チーム以外にも希望するチームには、地域づくり研究所が活動を支援していく。

また、副賞として箕輪町にあるコーキングスペース「夢まちJabo」を1年間無料で利用する権利が授与されている。

箕輪町やそれ以外の地域で活動した場合などは地域づくり研究所で相談するなどの支援が受けられて、ミノワッサンで発表したアイデアを箕輪町で実行する際には「夢まちJabo」を利用して作業などができる、というような仕組みとなっている。

この仕組みによって学生と地域づくり研究所・箕輪町の双方向のコミュニケーションも可能とし、プロジェクト実行へ近づくことができるのではないかと考えられる。

また、今回のミノワッサンの参加者・運営と箕輪町の間で生まれた「都市と地方の関わり」を断つことなく育んでいくとともに、今後もできるならばミノワッサンのようなイベントを行って、関係人口創出へつなげていきたい。

6 若者の活躍による地域づくりの重要性

若者の「やってみよう」から開催されたミノワッサンでは、出場者と運営学生の双方が地域と多様に関わる関係人口となった。今回の結果は、地域づくりの担い手不足が課題となる地方圏では、若者の活動を積極的に支援していくことで、この課題が解消される可能性を示唆できたのではないだろうか。

今後、箕輪町と地域づくり研究所は、若者の地域活動への支援を継続していく。行政の広域性や安定性などによって可能となる包括的な支援とNPOの特定分野に専門性を高めつつ先駆的・開拓的に課題解決に取り組めることによって可能となる即時性と柔軟な支援を掛け合わせ、若者が活動しやすい支援体制を構築していきたい。

最後に、学生によるアイデアソンの開催をご快諾いただき支援を頂いた箕輪町役場企画振興課の皆様、ミノワッサン開催にあたりご協力いただきました地域の皆様、審査員の先生方、そして、今回このような機会をいただきました近藤真司「社会教育」編集長にこの場を借りて御礼申し上げます。